



お灸をすると皮膚はどうなるの？

医学教育研究センター・解剖学ユニット 熊本賢三、榎原智美

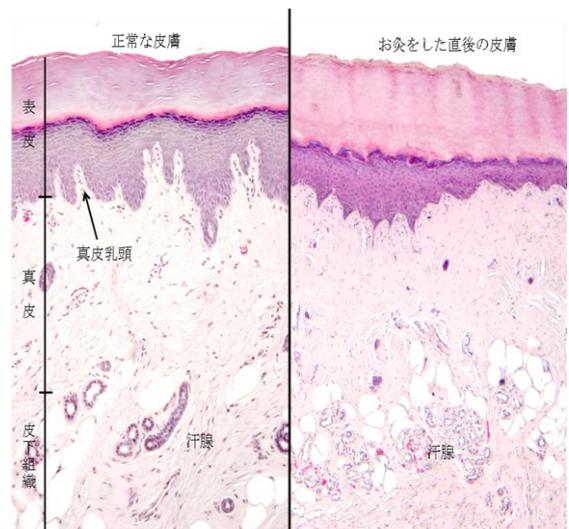
お灸をすると皮膚や神経はどのように変化するの？

皮膚に直接お灸をすると皮膚は焼け焦げて、しばらくすると瘡蓋（かさぶた）ができ、周囲が痒くなり、徐々に瘡蓋が小さくなって、はがれて元の状態の皮膚に戻ります。お灸が鍼治療に比べて治療効果が長く続くのは、皮膚に小さな火傷（炎症）を起こし、皮膚にある細胞・組織の再生を強く促すためと考えられます。

お灸を据えた周囲が痒くなるのはなぜでしょう？ ラットの足の裏にお灸を据えたところの皮膚の神経を観察しました。お灸直後に神経は一端焼かれて消失しますが、その後、痒くなるとされる部分に一時的に通常以上に多数の神経線維が皮膚の表層（表皮）に再生しており、これが痒みの原因のひとつと判りました。

右の図は、左は正常皮膚で、右はお灸直後の皮膚です。正常な皮膚では、表皮・真皮・皮下組織のいずれもきれいな形で構造もはっきりしています。お灸直後の皮膚では、表皮・真皮・皮下組織のいずれも熱のため水分が奪われて、全体的に収縮しています。そのため、間隙が狭くなり染色の色が濃くなり、正常皮膚に比べてかなりいびつな印象をうけます。

下は、神経線維を染色して緑色に描写しています。お灸後約1週間で、周辺部から新しく生まれた皮膚に過剰な神経が認められますが、やがて組織修復が終わるとかさぶたも取れ、神経も落ち着きます。



お灸する前の皮膚

お灸後8日目の皮膚

お灸後14日目の皮膚

